

令和 2 年 9 月 6 日
横浜歴史研究会 木村高久

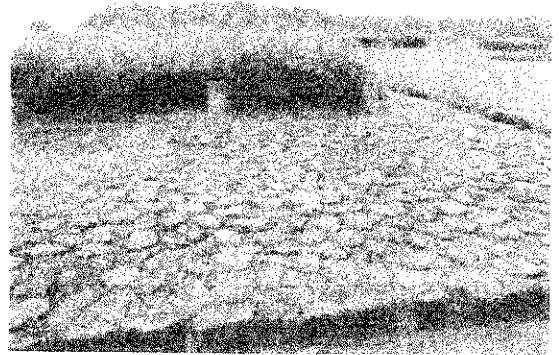
乙巳の変と大化改新の真相

1 はじめに

(1) 『日本書紀』誕生 1300 年

日本最古の正史である『日本書紀』が元正天皇に奏上されてから今年で1300年となる。

この節目の年に因み『日本書紀』の論点の一つと言われる「乙巳の変と大化改新」について真相を究明するものである。



伝飛鳥板蓋宮跡

(2) 『日本書紀』と『古事記』の差異

	日本書紀	古事記
命令者	第40代 天武天皇	第40代 天武天皇
成立年月	720年(養老4)5月	712年(和銅5)正月
奏上先	第44代 <small>げんしょう</small> 元正天皇	第43代 <small>げんめい</small> 元明天皇
目的	律令国家の正史	天皇家の歴史
内容	中国王朝に対し自国の正史を伝える。	天皇の正当性を国内で誇示
収録年代	<small>あひびやく</small> 天地開闢～第41代持統天皇	天地開闢～第33代推古天皇
巻数	30巻	3巻
編纂者	皇族・官人が中心となり編纂。 <small>とねりしんのう</small> 舎人親王により完成	<small>ひえだのあれ</small> 稗田阿礼が語り伝えた「帝紀」、「旧辞」を <small>おおのやすまる</small> 太安麻呂がまとめる。
形式	編年体	物語的
表記	漢文	日本語重視の変体漢文

(3) 『日本書紀』の信頼性

ア 信頼性の評価

- ① 戦前は皇国史観のもと『日本書紀』は全て正しいとされた。そして戦後は真逆となり全て虚構(うそ)となった。その後、遺跡の発掘や遺物(特に木簡)の発見および歴史研究の進展により、『日本書紀』の一部の史実が証明されるようになってきた。従って「全て正しい」も「全て虚構」も誤りであることが判明した。
- ② 『日本書紀』の現時点での信頼性については、次の3分類と考える。

- A 史実でない。(例) 神代(神話) など
- B 史実である。(例) (注1) など
- C どちらとも言えない。(例) 論点となっているもの、なっていないものがある。

(注1) 令和2年1月に三重県明和町の国史跡(齋宮跡)で、飛鳥時代後半の齋宮の中心施設が見つかった。天武天皇の娘で初代齋王とされる大来皇女(大伯皇女)^{おおくのひめみこ}の就任に伴い造営されたとみられる。『日本書紀』記述の裏付けとなる。

イ 藤原不比等(注2)の修史有りやなしや

関裕二氏(注3)によれば『日本書紀』編纂時の朝堂のトップが藤原不比等であることから、『日本書紀』は鎌足の業績を称賛し藤原氏の正義を証明する目的で編纂されたのであろう。」と書かれている。また、上田正昭氏(注4)は「不比等が修史に関係したことを実証する確実な史料はない。しかし不比等は実際に歴史編纂にかかわりを持ち、私見では『日本書紀』の完成に深くかかわったと見なしている。」と語っている。

これに対し、八幡和郎氏(注5)は「上山春平氏(注6)が著作の中で不比等を律令国家形成の立役者であり、また『日本書紀』の編纂もすべて彼の指導で行われたと書かれている。しかし、正史の世界では裏付けがありません。」と言われる。「不比等が父鎌足を強調するため粉飾したと言う人がいますが、大化の改新で鎌足の功績など何も出てこないのです。文武天皇から元正天皇初期までは最高実力者の一人でしたが、藤原一族は一人でした。独裁権力はない。藤原一族が権力を振るうようになるのは摂関政治(注7)からである。」と述べられている。

(注2) 不比等は鎌足の次男。飛鳥時代～奈良時代初期の公卿。官位最高位は右大臣

(注3) 歴史作家。武蔵学院大学日本総合研究所スペシャルアカデミックフェロー

(注4) 歴史学者。京都大学名誉教授

(注5) 徳島文理大学大学院教授。作家、評論家

(注6) 哲学者。京都大学名誉教授

(注7) 平安時代に藤原北家(良房)が天皇の外戚として摂政や関白などの要職を占めて、政治の実権を独占した政治形態

*私見 関氏、上田氏、上山氏の見解は裏付けの資料がなく得心できない。八幡氏の説が理論的と考える。

ウ 吉川真司氏(注8)の「飛鳥の都」のはじめには、「誤解を恐れずに言えば、王宮や寺院の発掘さらに木簡の解説により『日本書紀』の信頼性は揺らぐどころか、かえって回復してきている。これまでの『日本書紀』批判と七世紀史の再構成は行き過ぎではなかったか。」と記述されている。

(注8) 京都大学教授。シリーズ日本古代史③「飛鳥の都」著者。岩波新書発行

2 乙巳の変と大化改新の背景

(1) 東アジアの動向

当時の東アジアの状況は緊迫していた。589年隋が陳を平定し中国を統一支配したが、618年高句麗遠征に失敗した隋は唐に滅ぼされる。644年から唐が高句麗遠征を開始する。この強大帝国の圧迫に対処するため朝鮮半島三国(高句麗、百済、新羅)そして倭国では中央集権体制をとることが余儀なくされた。

642年高句麗は將軍泉蓋蘇文せんがいそぶんがクーデターを実行し、第27代栄留王ほか穏健派貴族180人を殺害し、宝蔵王を擁立し行政と軍事権を掌握した。

(2) 蘇我氏がかかわる大事件

ア 穴穂部皇子と宅部皇子の暗殺

587年4月9日用明天皇が崩御。5月物部守屋が穴穂部皇子を天皇に立てようとしたことを知った蘇我馬子は、6月7日炊屋姫尊かしきやひめのみこと(後の推古天皇)を奉り佐伯連丹経手さいきのむらじにふて、土師連磐村はじのむらじいわむら、いくはのおみまくい的臣真嚙まがひに穴穂部皇子と宅部皇子殺害を命じ、この日の夜中に実行された。同年7月、馬子は諸王子等を束ねて物部守屋を攻め滅ぼした。

イ 崇峻天皇殺害

穴穂部皇子、物部守屋が殺害されたあと、次の天皇は泊瀬部王子はつせべのみことしかなく、叔父の馬子の擁立で587年8月崇峻天皇として即位した。ところが馬子の専横が目立ち、崇峻と馬子の間に対立が生じたのである。ある日、崇峻天皇に猪を献上する者があったが、この猪を指さして「いつの日かこの猪の

首を斬るように、自分が憎いと思う人を斬りたいものだ」と話した。これを聞いた馬子は東漢^{やまとのおやの}直駒^{あたいにま}に命じて崇峻天皇を暗殺した。(崇峻5年(592)11月3日)。さらに馬子は下手人である東漢直駒を殺害する。口封じといわれる。593年敏達天皇の皇后・炊屋姫^{かしきやひめ}(推古天皇)が即位。

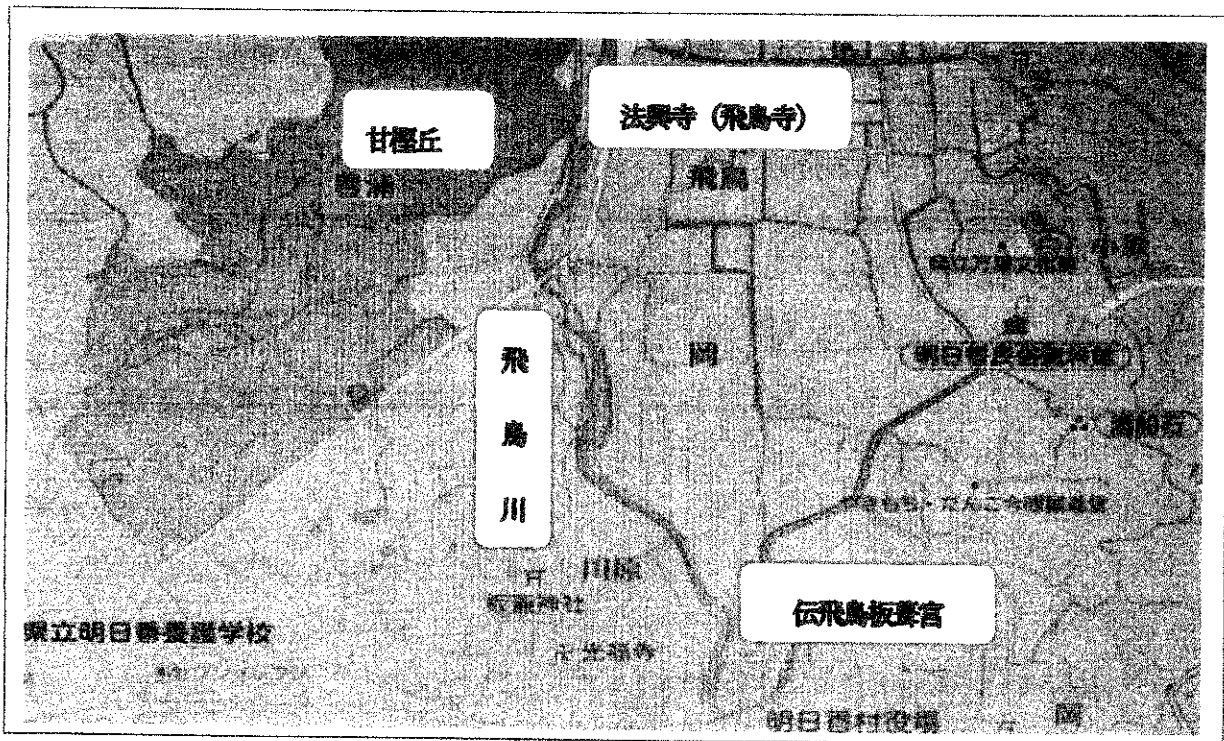
ウ 境部摩理勢臣の殺害

推古36年(628)3月推古天皇が崩御する。後継者候補は田村皇子か蘇我系の山背大兄王^{やましろのおおえのおう}(聖徳太子の子)のいずれかであった。蘇我蝦夷は群臣を集めて協議するもまとまらなかった。そこで蝦夷は山背大兄王を支持した境部摩理勢臣(蘇我氏の一族)を説得するも従わなかったため摩理勢臣を殺害する。これにより山背大兄王は有力な後援者を失った。629年蝦夷が推した田村皇子が舒明天皇^{じゆめい}として即位した。

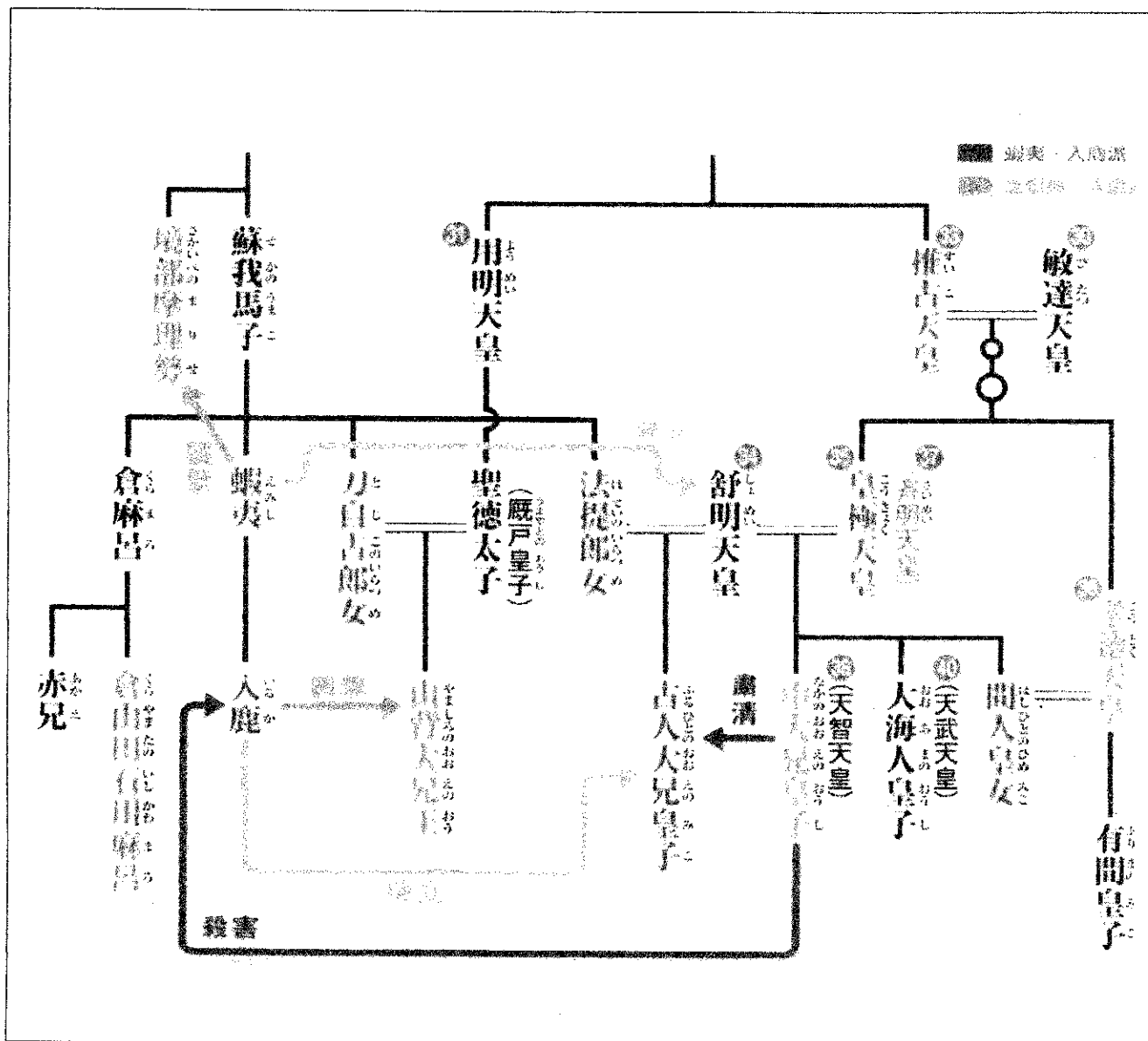
エ 山背大兄王一族の討伐

舒明天皇が崩御(欽明13年(641)10月)後、皇極天皇(舒明皇后)が即位したときは49歳であり、次の天皇を決めるまでの中継ぎであった。皇位継承者としては舒明天皇の皇子で蘇我系の古人大兄皇子^{ふるひとのおおえのみこ}、皇極天皇の同母弟の軽皇子それと用明天皇の孫の山背大兄王がいた。入鹿にとり馬子の孫の古人大兄王を擁立するには山背大兄王が目障りであった。皇極2年(643)11月1日、入鹿は巨勢臣徳太^{こせのおみとこた}・土師娑婆連^{はじさばのむらじ}らに斑鳩の山背大兄王の宮を急襲させ上宮一族を滅亡させた。^{いかるが}

(3) 飛鳥(明日香)の地図(令和2/5/ HP奈良県明日香 goo 地図から転用・一部改修)



(4) 天皇家と蘇我氏の関係 (『日本書紀』と天皇126代) から転写)



3 乙巳の変

(1) 『日本書紀』の記述

645年(乙巳)6月12日、三韓の朝貢の儀が行われるため皇極天皇は飛鳥板蓋宮の大極殿いたぶきのみや だいごくでん (注9)にお出ましになった。古人大兄皇子が傍に控えている。そこに蘇我入鹿が入って着座した。
 蘇我倉山田石川麻呂臣くらのやまだのいしかわまろのおみは御座の前に進んで三韓の上表文を読み始めた。
 その間に中大兄皇子なかのおおえのみこ(葛城皇子)は自ら長檜を持って大極殿の脇に隠れた。中臣鎌足なかとみのかまたりは弓矢を持

って警護した。中大兄は佐伯連子麻呂と葛城稚犬養連網田に箱の中から二つの剣を授けて、「ぬからず、素早く斬れ」と告げた。倉山田麻呂が上表文を読み終わろうとするが子麻呂らが出てこない
ので、恐ろしくなり不安と緊張から全身に汗が噴き出し、手も震え声も乱れた。

中大兄は刺客の兩名が入鹿の威勢に押され怯んでいるのを見て、掛け声を出し子麻呂らと共に躍り出ると入鹿の頭や肩に斬りつけた。入鹿は驚いて座を立とうとした。子麻呂が入鹿の片方の脚に斬りつけたので入鹿は御座の下に転落する。そして、天皇に向かって「日嗣の位にあるべき御方は天子
です。私に何の罪があるのでしょうか。その訳を言ってください。」と叫んだ。天皇は大いに驚き中大兄に「これはいったいどうしたのか」と問いただした。中大兄は平伏して奏上し「入鹿は王子たちを
全て滅ぼして、皇族を断とうとしています。鞍作もって天子に代えられましようか。」と述べた。天皇が席を立てて宮殿の中に入られると、子麻呂・網田は入鹿を斬り殺した。

この日、雨が降って庭には流れる水が一杯であった。入鹿の屍をかばね 蓆むしろ 蓆おおっで覆った。古人大兄は自らの宮に逃げ帰り、人々に「韓人が鞍作臣を殺した。私の心は痛む。」(注10) といひ寝所に入って閉じこもってしまった。

中大兄は法興寺(飛鳥寺)に入って皆とし備えられた。諸々の皇子、諸王、臣、連などがお供につく。人を遣わし入鹿の屍を蝦夷大臣に届けた。

東漢直らは族党を総集し蝦夷を助けようと甘樫丘に集結したが、高向臣国押が武器を捨てて去ったので、他の賊徒もみな逃走した。

翌13日、蝦夷らは天皇記・国記・珍宝を焼き、屋敷に火を放ち自殺した。なお、焼かれる国記を船史恵尺が取り出して中大兄に奉った。こうして、蘇我本宗家は滅亡したのである。14日、皇極天皇は位を軽皇子(孝徳天皇)に譲られ、中大兄を皇太子(注11)とされた。

(注9) 当時、大極殿はなかった。天皇の生活空間である大殿である。

(注10) 韓人とは朝鮮三国の人のこと。朝鮮三国との外交問題が原因とのこと。蘇我倉山田石川麻呂のことなどの見解あるも不明。

(注11) この時代、皇太子の制度は存在しなかった。

(2) 入鹿成敗における中大兄の奏上は事実か

乙巳の変に関する『日本書紀』の記述で、入鹿が中大兄らに斬りつけられた際に「私に何の罪があるのか。」と叫び、中大兄は「入鹿は王子たちを全て滅ぼして皇族を断とうとしています。」と奏上したとあるが、これは事実でない松尾光氏(注12) および遠山美都男氏(注13) はいう。ただし根拠は異なる。

(注12) 早稲田大学エクステンションセンター・NHK文化センター等の講師

(注13) 学習院大学、國學院大學、日本大学非常勤講師

ア 松尾氏は「蘇我馬子が崇峻天皇を暗殺し大王を凌ぐ力を見せてもその後自ら大王にならなかった。蘇我氏は大王になることは全く考慮していない。その理由は、遣隋使（遣唐使）の派遣で中国の王朝に朝貢すれば冊封（注14）を受けたこととなり臣下の礼を取ったことになる。そしていったん冊封を受ければ、他の氏族などの臣下から国王になることは出来ないことを蘇我氏は知っていたからである。」と書かれている。

(注14) 古代中国の皇帝が周辺諸国の長に対し冊書・称号を授け国王に封じること

イ 遠山氏は「大王家に娘を妻として提供し、大王家の身内として王権に寄与存続してきたので大王家を篡奪するはずがない。」という。

* 私見

蘇我氏が自ら天皇になることは考えていなかったは両者の説の通りである。しかし、中大兄らの行動に大義名分は無かったのであろうか。以下、検証してみる。

(3) 蘇我家の専横

ア 『日本書紀』にある蘇我氏の専横について列举してみる。

- ① 皇極元年是歳条、蘇我蝦夷は、自家の祖廟を葛城の高倉にたてて、八佾の舞をした。
- ② 国中の百八十にあまる部曲を召し使って、双墓を生前に今来（御所市東南）に造った。一つをお記みささぎを大陵といい、蝦夷の墓。一つを小陵といい、入鹿の墓とした。おまけに聖徳太子の部民をすべて集めて墓の工事に使った。皇極2年（643）10月条、蝦夷は紫冠を子の入鹿に授けて大臣の位になぞらえた。
- ③ 皇極3年（644）11月条、蝦夷と入鹿は家を甘樫丘（注15）に並べてたてた。蝦夷の家を上のみかど宮門と呼び、入鹿の家を谷の宮門と叫んだ。男女の子たちを王子と叫んだ。家の外にとりでの柵を囲い、門の脇に武器庫を設けた。力のある者に武器をもたせ常に家を守らせた。

(注15) 甘樫丘は標高148m、南北約1km。古来、神が住む聖地とされた。

*私見 『日本書紀』にある蘇我氏の悪行については、うわさ話であって実際に行われたか不明であるとか捏造の意図を感じるなどの批判があるが、確かな証拠がなく水掛け論になるものである。

ここで観点を変えて考古学的な検証も踏まえて評価をしてみる。

- ① まず、奈良県明日香村に7世紀初頭の石舞台古墳がある。被葬者は蘇我馬子が有力である。その石舞台から南東約400mのところには都塚古墳があり、ピラミッド型の方墳と判明した（2014年8月

13日発表)。6世紀後半のもので、東西が約41m、南北が約42mである。蘇我稲目の墓の可能性が高いといわれる。なお、方墳の形は高句麗の王陵、百済の古墳に似ているとのことである。

② 二つ目は、蘇我邸跡についてである。奈良文化財研究所により継続的に発掘調査が行われているが、平成22年(2010)の調査で甘樫丘の東麓中腹から蝦夷・入鹿の邸宅跡と思われる遺構が出土した。また、城柵らしきものも検出された。この遺跡からは焼けた土器片や壁土も出土している。これらは『日本書紀』の記載と一致する。

③ 蘇我氏は飛鳥という狭い地域にこのような巨大な古墳を作り、また甘樫丘に蘇我邸を構えることができるほどの大きな権力・財力を有して天皇に匹敵するほどの権力者であったことは事実である。その他、前述したように馬子が自分に敵意をもった崇峻天皇を暗殺し、また入鹿が山背大兄王一族を自害させ滅亡させたなど蘇我本宗家の非道がある。

さらに、乙巳の変では蘇我一族の倉山田麻呂臣くらのやまだのまろのおみや高向臣国押たかむこのおみくにおし(宮中守衛)らがクーデター派に属しており、また、乙巳の変で入鹿を誅したあと中大兄が直ちに法興寺に入り蝦夷らの襲来に備えたが、諸々の皇子、諸王、諸卿大夫、臣、連、伴造、国造などが皆お供についたとある。蘇我宗家の独裁的なやり方が多くの人々に支持を得ていなかった証拠と言えよう。

以上を全体的に考えると、蘇我氏の悪行はあったと言える。また、高句麗の將軍泉蓋蘇文せんがいそぶんのクーデターを真似て古人大兄を天皇に据えて入鹿が独裁的権力者になろうとすることは、入鹿が実質上天皇になることと同じであると中大兄は言いたかったのではないだろうか。

(4) 蘇我氏見直し論

近年、蘇我氏見直し論が一部の人から出ている。瀧音能之氏たきおとよしゆき(注16)は「本当は蘇我氏が改革の旗振り役で中大兄と鎌足はそれを壊しにかかったのだ」という。また、「天皇家は6世紀頃から屯倉みやげという直轄領を増やし力を養ってきたが、これに大きく貢献したのが蘇我氏であった。」と主張される。

(注16)駒澤大学文学部歴史学科教授

*私見

蘇我氏が屯倉での管理について戸籍を活用し人身把握という当時最新の事務処理方法を取り入れたことは評価できる。だからと言って、それだけで蘇我氏は悪者ではないとは言えない。

(5) 「乙巳の変」の首謀者は誰か

『日本書紀』では乙巳の変の首謀者は中大兄で鎌足が協力者となっているが、異なる説が多数ある。そこで、それぞれの説を検証することとする。

説	首謀者	主張者	内 容
1	中大兄・ 鎌足	① 倉本一宏氏 ② 福地智弘氏	① 入鹿は、権臣が傀儡王を立てて専横を行うと言う高句麗と同様の権力集中を目指していた。これを阻止するために実行した。 ② 蘇我氏が権力を握るうえで邪魔な存在であった山背大兄皇子を自害させたことは許せないとして、中大兄と鎌足が立ち上がった。 私見： 若輩の中大兄と鎌足だけでは力不足である。
2	軽皇子 (孝徳天皇) とその一派	① 遠山美都男氏 ② 瀧音能之氏	① 皇位候補は軽皇子と古人大兄の二人であった。この様な状況下で軽皇子を天皇にしようとして起こした行動であった。 ② 乙巳の変後、要職に抜擢されたのが軽皇子の縁者ばかりであるから軽皇子が首謀者である。 私見： 軽皇子と一派だけでは実行できない。皇極天皇と中大兄を無視している。
3	皇極天皇・ 中大兄	松尾 光氏	中央集権国家体制導入は蘇我氏と中大兄は同じ認識であったが、目指す体制が違った。蘇我氏は太夫氏族が共和的に決定を考えたが、中大兄は天皇を中心とする体制を目指した。 私見： 蘇我氏が共和的に決定との根拠がない。また、皇極天皇と中大兄の二人では無理である。
4	中臣鎌足	① 坂本 勝氏 ② 吉川真司氏 ③ 神 一行氏	① 蘇我氏の独善的振る舞いにより豪族たちの不満は高まった。反蘇我一派によるクーデターが起きた。 ② 『藤氏家伝』によれば乙巳の変の黒幕は鎌足である。 ③ 崇仏論争で失脚した鎌足は、中臣家の再興を期していた。また入鹿が山背の大兄王を武力で滅ぼしたのが許せなかった。 私見： 鎌足は参謀役であり首謀者は荷が重すぎる。

5	軽皇子 皇極天皇 中大兄	私見	蘇我氏は高句麗の將軍泉蓋蘇文のクーデターを念頭に、皇極天皇に退位を迫り古人大兄の天皇擁立を図った。 拒否すれば3人の抹殺も考えたであろう。そこで、中大兄らは先手を打ったのである。なお、鎌足は三者の参謀役・調整役としての役割を果たしたと思われる。
---	--------------------	----	---

4 大化改新

(1) 新政権の体制 (645年6月14日)

天皇【孝徳天皇】 ・ 皇太子【中大兄皇子】

左大臣【阿倍内麻呂】・右大臣【蘇我倉山田石川麻呂】・内臣【中臣鎌足】

国博士【高向玄理・僧旻】

(2) 古人大兄皇子の死 (大化元年 (645) 9月12日)

古人大兄は出家し吉野へ隠退していたが、吉備笠臣垂きびのかさのおみしだるから「古人大兄皇子が謀反を企てている」との密告を受けた中大兄は直ちに古人大兄らを討った。

(3) 難波 (大阪市) へ遷都

大化元年 (645) 12月9日、孝徳天皇は都を難波長柄豊碕宮なにわのながらのとよさきのみやに移された。

(4) 改新之詔

大化2年(646)元旦、大化改新における改革の方針を示すために詔を發せられた。

ア 改革の骨子

第一条 公地公民制 : 土地と人民をすべて国家の支配下に置く。(子代の民・部曲の民などの部こしろと屯倉・田莊かきなどの施設の廃止、食封じきふの支給について)

第二条 中央集権体制 : 地方の行政単位 (国・郡) を定め、軍事や交通の制度を整える。(京の設置および地方行政制度・交通制度の制定について)

第三条 班田制 : 戸籍・計帳と班田収受法の制定について

第四条 新税制 : 旧税制の廃止と新税制の制定について

◎ 第一条から第四条までは主文と副文から構成されている。

イ 郡評論争

改新之詔の第二条に地方行政組織として「郡」こおりを定めてあるが、当時の金石文や氏族系譜などでは「評」こおりと記載されているものが多い。このことから後代に書き替えられたとの意見が出され

論争となった。結局、藤原宮跡（奈良県橿原市）から出土した木簡が決定することになった。大宝律令（大宝元年（701））以前が「評」で以降が「郡」であることが明らかになった。これにより「詔」の信憑性を巡る論争となった。

ウ 大化改新肯定論と否定論

改新之詔は第一条から第四条まで、どれも主文と副文により構成されている。これから、主文は孝徳時代のもので、副文は大宝令により修飾されたものというのが**肯定論**である。これに対し、副文だけでなく主文も疑わしい。実際に改革が行われたのは天智・天武時代であるが**否定論**である。今日の結論としては、第一条、第四条主文と第四条副文の原型が孝徳朝時代のもので、第二条および第三条の主文と副文は当時のものではないこととなった。

***私見** 大化改新は実行されなかったとの見解があるが、それは違う。全てではないが一定の改革が行われたのは事実である。ただし急激的ではなく時間をかけてである。また「改新の詔」はその計画書であった。

(5) ^{はくそうれい}薄葬令 大化2年（646年）3月22日發布された。

儒教による薄葬の思想による制度。身分により墳墓の規模を制限すると共に殉死や宝物の副葬などの禁止

(6) 蘇我倉山田石川麻呂の死

大化5年（649）年3月、右大臣蘇我倉山田石川麻呂の異母弟の蘇我臣日向^{ひむかひ}が中大兄の宮へ訪れ、石川麻呂が中大兄の暗殺を計画していると讒言^{ざんげん}した。中大兄はそれを孝徳天皇に奏上。孝徳が兵を差し向けたので石川麻呂は山田寺で一族共に自害した。後に冤罪^{えんざい}であることが判明した。

(7) 中大兄ら飛鳥へ帰還

白雉4年（653）新しい国家体制を築くため努力していた孝徳天皇と中大兄であったが、考え方のずれなどから関係がぎくしゃくしていく。中大兄から本拠地を難波から飛鳥へ戻すことを進言する。しかし孝徳天皇は同意せず、中大兄は母の前皇極天皇、妹で孝徳天皇の^{はしひとの}大后である間人^{ひめみこ}皇女や皇族、豪族の多数を引き連れて飛鳥へ戻ってしまった。

(8) 孝徳天皇崩御

孝徳天皇は中大兄らが飛鳥へ移ったことから山碕に宮を造らせた。白雉5年（654）10月10日難波宮にて孝徳天皇崩御する。

(9) 齐明天皇誕生

655年正月3日、飛鳥板蓋宮において皇極天皇が再度天皇に就任した。（^{ちようそ}重祚）（注17）。齐明

天皇となる。

(注17) 退位した天皇が再び即位すること。

(10) 大化改新に対する「吉川真司氏」の見解

『日本書紀』孝徳紀を読むなら、公民制・官僚制の創出過程は極めて自然に理解でき、『常陸風土記』などの諸史料とも矛盾しない。全体が虚構であるとはとても言えないのである。改新詔だけが夾雑物である。『日本書紀』の認識・叙述は基本的に正しいと考えられる。

参考文献

- 1 「日本書紀 下」 宇治谷 孟著 講談社学術文庫 1999・01・20発行
- 2 「日本書紀はなにを隠してきたか」 遠山美都男著 洋泉社 2001・07・21発行
- 3 「闘乱の日本古代史」 松尾 光著 花鳥社 2019・09・20発行
- 4 「飛鳥の都」 吉川真司著 岩波新書 2011・04・20発行
- 5 「日本史の論点」 中公新書編集部 編 中公新書 2018・08・30発行
- 6 「私の日本古代史(下)」 上田正昭著 新潮選書 2013・05・15発行
- 7 「天智天皇」 遠山美都男著 PHP 新書 1999・02・03発行
- 8 「持統女帝と皇位継承」 倉本一宏著 吉川弘文館 2009・03・01発行
- 9 「逆転した日本史」 河合 敦著 扶桑社新書 2018・07・01発行
- 10 「最終解答 日本古代史」 八幡和郎著 PHP文庫 2015・02・19発行
- 11 「飛鳥時代の謎」 神 一行編 ワニ文庫 1992・01・05発行
- 12 「古代史の謎は「海路」で解ける」 長野正孝著 PHP新書 2015・01・30発行
- 13 「古代の技術を知れば『日本書紀』の謎が解ける」 PHP新書 2017・10発行
- 15 「図解 古代史 秘められた謎と真相」 関 裕二著 PHP研究所 2004・08発行
- 16 「図解 古代史」 監修 東京都歴史教育研究会 成美堂出版 2007・12発行
- 17 「『日本書紀』と天皇126代」 瀧音能之監修 笠倉出版社 2020・03発行
- 18 「『日本書紀』の真実」 瀧音能之総監修 宝島社 2020・01発行
- 19 「歴史読本 2002年1月号」 長尾誠夫著 新人物往来社 2002・01発行
- 20 「季刊 明日香風 109」 (財) 飛鳥保存財団 2009・01・01発行
- 21 「歴研よこはま第77号」 松尾 光著分 横浜歴史研究会 2019・11・30発行
- 22 「歴史研究第656号」 加来耕三著分 歴史研究 2017・11・10発行